



読書感想文コンクール
**わたしの漱石、
わたしの一行**

中学生の部

最優秀賞	17
優秀賞	18
朝日新聞社賞	20
紀伊國屋書店賞	21
新潮社賞	23
早稲田大学賞	24
佳作	26

高校生の部

最優秀賞	40
優秀賞	41
朝日新聞社賞	43
紀伊國屋書店賞	44
新潮社賞	46
早稲田大学賞	47
佳作	49



非人情の旅

新宿区立牛込第三中学校 2年

北原 未彩

作品名『草枕』

選んだ一行

詩人とは自分の屍骸を、自分で解剖して、その病状を天下に発表する義務を有している。

先に読んだ谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」の中に、夏目漱石が『草枕』の中で羊羹の色を讚美していた、と書かれていたことを思い出した。それで、その『草枕』を羊羹の描写を探しながら読み始めた。そこで私はこの一行に出会った。

「屍骸」、「解剖」それまでの詩的な表現とは打って変わった不気味な単語が表れ、私ははっとした。しかし、内容を理解すると、これらを敢えて使った漱石の意図が見えた。

『草枕』は、画工である主人公が、春の山を登りながら思いにふける場面から始まる。その考えにふけている内容が、漱石自身の

人生や芸術に対する考え方だと思え、興味深い。彼は、この世の中を住みにくいと感ずる。しかし人間である以上ここで生きていくしかないし、そうであれば、少しでもくつろげて住みやすいようにしようと思う。そこに芸術の必要性を認め、美を追求し、非人情の旅に出る。どのようにそれを遂行しようとしているかというところ、第三者の視点を持つと努力することである。主人公によれば、苦しんだり、怒ったり、騒いだり、泣いたりするのが人情である。そういった感情を一步引いた位置から眺めるのが非人情である。これがなかなか難しい。それが、選んだ一行の「詩人とは自分の屍骸を、自分で解剖して、その病状を天下に発表する」ということだろう。非人情とは、まさに、自分の心にメスを入れるように困難なことなのだ。

一步引いた視点を持つために具体的にどうすればよいのかという方法が書かれている。「何でも蚊でも手当たり次第第十七字にまとめしてみるのが一番いい」という。すると、その十七字を考える間に、例えば自分の腹立たしさも他人に変じているという。日々の生活のなかで、ちょっと困ったとき、一句を考える。

「蟬の声原稿用紙に汗落ちる」
なるほど、少し冷静になれる。苦しい場面が詩的になった。十七字に表すことは、自分の感情からいったん離れて、状況を俯瞰することにもなるのだ。

ところで、この作品を読むきっかけとなった羊羹についてはおよ

そ八行にわたり美しい描写が続く。実はこの羊羹、主人公が気になっている女が部屋に持ってくるのである。一歩進んでしまいそうな女への気持ちを感じさせるため、ここまで羊羹に気持ちを向けているのではないかと思った。人は人であるがゆえに、努力をしても人情から離れられないときもあるのかもしれない。

「われならぬ人の姿と思えば、詩にもなる、句にも詠まれる。」春の雨に濡れながら山道を行く主人公が語る。まだ中学生の自分が、これからの人生で困難な場面であったとき、「自分の屍骸を、自分で解剖する」と漱石が表したように、第三者の視点を思い出すことができれば、何とか試練を乗り越えることができるだろう。そんな生き方のヒントを、私はこの一行から学んだ。

審査講評

俳句を持つ「言葉を越えた言葉の力」のようなものに着目して、関心の寄せ方がおもしろい。大変理性的な文章で、大人でも理解しやすい「非人情」という言葉を自分のものにしていく。

《中学生の部》

優 秀 賞

まだ見ぬ君へ

日本女子大学附属中学校 1年

奥田 環

作品名『こころ』

選んだ一行

然し：然し君、恋は罪悪ですよ。

私はまだ恋をした事がない。この本を手にして改めて感じた。私の中の恋は綿あめを少しずつ口の中で溶かしながら味わうものではないかと漠然と思い描いていた。しかし、漱石が紡ぐ恋の世界は蜘蛛の巣に捕われた蝶の様な、逆に蝶をじわりと狙う蜘蛛自身である様な、重く苦しい世界であった。先生もKも初めてお嬢さんに恋をした時、蝶が花を愛でる様に軽やかな気持ちになっていた。しかし、自らの恋を達成することは頭の中で考えるだけではなかったのだ。胸や心臓、肉や血の中までもその人へ思いがめぐるといふ。親子の愛とは異なり、全く違う者が自らの体内を駆けめぐるときの異物感、それは苦痛であるのだろう。そうしている間に蝶であった自分はだん

だと蝶を捕えようとする蜘蛛になってしまふのだ。美しい姿をしていると思っていた自分。それが恋をしている間に、姿を変え、自分の欲を満たそうと蜘蛛糸を吐く醜い蜘蛛になってしまふのだ。先生はKからお嬢さんへの気持ちを告白された時、恋というKの魔法棒のために「恐ろしさの塊り」「苦しさの塊り」に変えられてしまったのだ。人を変えてしまふ恋。それを先生は「罪悪」だと言っているのだと思う。私は恋をした時の自分が想像出来なくなる程、恋に怯えはじめていた。

先生は恋によって姿を変えた自分を、自分を欺いた叔父と同じく醜んでいた。叔父に対して怒って醜んでいる間は自分は正義で相手は罪人だ。しかしその罪が自らに向いた時、人は他を許すよりも自分を許すことは出来なくなるのではないだろうか。自分を許してしまつたら、誰よりも憎む叔父を許すことになる。先生は叔父を憎むことで、自分を固い鎧で守ることができたのに、自分を許せば全てを手放すことになってしまふ。もしかしたら人は怒りや悲しみがなければ生きてはいけないのかもしれない。つまり恋も必ず怒りや悲しみを伴うものなのだ。漱石は言っていると考えた。

先生の言う「罪悪」である恋。私にはまだ経験のない未知の世界であり、雲がかかっているものに変わってしまった。しかし、一つだけ雲間に光を感じる事がある。どんなに恋によって変わってしまった先生であつてもお嬢さんへの思いは決して変わらぬのだ。人生を死んだ様に生きていた先生であるが、希望を残していた。妻と

なつたお嬢さんと最初に出会つた時と変わらず、純白な存在として想っているのである。私はずっと先生が、蜘蛛になって蝶を捕えても決して蝶を殺さず大切に見守る姿を、この本を読みながら感じていた。醜い姿になつても、愛する美しい蝶は決して汚すことが出来なかつたのだ。

私はまだ恋をした事がない。でも、まだ出会っていない君へ、漱石は恋には苦しい事も悲しい事も、そして希望もあると教えてくれた。君といつか出会うのを怯えるのはもうよそうかと思う。

審査講評

親子の情でも兄弟の情でもない新しい情(恋)とは何なのか、作品に則して考えている。さらに、自分の将来のパートナーを想定して、作品を自分のものにしていく。感性的にも優れ、比喩もユニーク。

孤独について考える

新宿区立牛込第三中学校 2年

森田 美瑛蘭

作品名『こころ』

選んだ一行

自由と独立と己とに充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの寂しみを味わわなくてはならないでしょう。

「自由と独立と己とに充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの寂しみを味わわなくてはならないでしょう。」

これは『こころ』の中で先生が主人公に話した言葉である。この一行が私の心に響いた。

『こころ』を読み終えてこの作品は孤独について描かれていると思っ

「漱石の思う孤独とはどういうものなのか。」国語辞典によれば「孤独」とは、「身よりも友達もないなど、ひとりぼっちであること。」

とある。疑問に思いもう一度『こころ』を読みかえしてみた。漱石の思う孤独は、このような意味とはちがうような気がした。そんな中、この一行を見つけた。この一行は漱石の思う孤独とはどうゆうものなのか、という疑問を解決するとともに、今のわたしたちの生きている時代や、漱石の生きた時代の孤独についても考えさせられるものだった。

「自由と独立と己とに充ちた現代に生まれた我々は、その犠牲としてみんなこの寂しみを味わわなくてはならないでしょう。」

この一行を考えてみる。この「現代」とは『こころ』が書かれた明治時代の頃だろう。また、明治時代は西洋文明が入ってきたというイメージがある。西洋文明は日本よりはやく個人の自由を手に入れた。一方、昔の日本はまだ貧しく皆が協力しないと生きていけない社会だったと考える。しかし、西洋文明が入ってきてからは、個人が豊かになり、次第に「自由」と「独立」を手に入れた。今私たちが生きる時代のように、個人が自由になった結果、封建時代の共同体社会での心の一体感を失ってしまった。同時にエゴイズムや個人主義も進んでいったのだと思う。

漱石も人々が共同体社会だった頃の連帯感を失い、相手の心までが分からなくなってきてしまったと考えていたのではないか。それを漱石の言う寂しみとして、自分なりに解釈してみる。自由と独立と自我を手に入れた時代に生き、それらを得る事は、個人個人にとっての世間が狭く、お互いの心の中が分かる昔とはちがってきた。

近代化が進むにつれて自由と独立を得て、世間やコミュニティが広がるとともに相手の心の中が分からなくなる孤独感を味わわなくてはならないのだ。

更にこれを私達の生きる現代に当てはめてみる。今や家族ですら何を考えているか正確には分からないし、自分の事も、分かってはもらえない。現代は個人の自由は素晴らしいが、深い孤独感に悩む人も多いだろう。漱石は『こころ』を書いた百年後にこんな時代がくるのを分かっていたのだろうか。

私の考えでは、漱石が思う孤独とは家族などのごく身近な人同士でも心の中をすべて分かり合えない時代の寂しさだと思う。

そこで自由や孤独について私なりに考える。自由を謳歌できる現代社会の中で、広がり続けるコミュニティや人間関係を常に良い状態にする努力で、少しでも相互の理解が深まり孤独感が癒されるのではないだろうか。

審査講評

「近代」の孤独を考え、冷静、的確な筆致で描いている。さらに現代的課題へと結びつけていて、中学生にしてここまで考えているのかと感心した。

《中学生の部》

紀伊國屋書店賞

空気を「読まない」勇氣

筑波大学附属中学校 1年

河野 桜己

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

「正直にしていれば、だれが乗じたって、こわくはないです」

人間が共同体に属すると、多かれ少なかれ「迎合」が生まれる。誰しも集団から孤立したくはないからだ。

だが坊っちゃんは、自分の考えを信じ、強者や、強者に迎合する人々に立ち向かっていく。嫌われても、孤立しても、自分の信念を曲げない主人公の姿は、素直に読者の心に響く。本能のままに行動したあげくに失敗しても、ひるむことなく校長らに意見する姿に共感できる。

この坊っちゃんから浮かび上がるのは、あきれるほどの「正義感」だ。うらなり先生が不意ながら延岡に転任する際は、断固と

して昇給を拒否する。不当に解雇された山嵐に味方して共に赤シャツを倒し、自らも辞職する。どちらも、信じる道を突き進み、自分の心に正直であるがゆえの行動だ。確かに損はした。だが、他人の不幸で自分だけが得をすることを、彼の心は許さなかった。本心のままに行動したことで、彼の心は晴れ晴れしたのではないだろうか。だが、正直すぎるのが災いして、生徒や他の教師には幾度となく軽蔑され、口車に乗せられる。それに対して、坊っちゃんはいつでも真っ向勝負を挑んだ。「正直にしていれば、だれが乗じたって、こわくはないです」赤シャツに告げたこの言葉を彼は守り抜いた。そんな彼の芯の強さには驚くばかりだ。

ただ、いくら芯が強い坊っちゃんとはいえ、孤軍奮闘し続けるのは辛くはなかったか。そんな彼の心を支えたものは、山嵐や清などの信頼できる存在だった。彼の正直な性格を認め、支え合える仲間や味方だ。山嵐とは何度か争ったが、互いの潔さや裏のなさに共感し、支え合える同志となった。清は、家族から疎まれていた彼の心の美しさを理解し、心よりどころであり続けてくれた。仮に坊っちゃんが他人に迎合する人物だったなら、確かに世渡りはしやすかっただろうが、本当の仲間は見つけられなかったはずだ。この二人と心を通い合わせることで、彼は不条理と闘ってゆけたのではないだろうか。

少し前に「KY」という言葉が流行した。「空気が読めない人」という意味である。坊っちゃんは、いわゆる「KY」かもしれない。

たしかに場の空気が読めないのは感心しないが、心の中の考えは一人ひとり自由でいい。自分の心に正直に生きる坊っちゃんは、空気が「読めない」のではない。「読まない」のだ。ありのままの自分であるからこそ、他人と認め合い、時に争い合いながらも、良き仲間や人間関係を作っていけるのではないか。時には空気を「読まない」勇気を持つ。それができれば、きっと何かが変わるはずだ。

審査講評

「自分はこう読んだ」が明確に主張されている。文章に力強さを感じた。単なる作品の解釈を越えて、「私の一行」を自分のものにしていく。

漱石の「百年」

学習院女子中等科 1年

駒形 彩葉

作品名『夢十夜』

選んだ一行

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きっと逢いに来ますから」(『夢十夜』第一夜より)——二〇一六年、今年は漱石没後百年のメモリアル・イヤーである。あわせてこの『夢十夜』は一九〇八年七月八月にかけて朝日新聞に連載されており、一〇八年目の夏を迎える。ちょうど人間の煩惱の数に等しい一〇八つ、赤い日をいくつも勘定して、私たち自身もまた、漱石の墓標の傍らで、彼の再来を待ち続けてきたといっってよい。今年はその墓標に、と選ばれたかのようなペルセウス流星群が天から降り、猛暑のためもあってか百合の匂いがひとときわ際立つ。『夢十夜』の幕を開ける第一夜

の、天に召された乙女と星、百合、地上に残された恋人というモチーフはラファエル前派の画家ロッセティの「祝福されし乙女」から得たイメージであることは、よく知られている。この幻影をたどり、私が今年「わたしの漱石、わたしの一行」を選ぶなら、やはり間違いない第一夜のこの一節である。私達はこの一節にふれて、自らもまた「百年はもう来ていたんだな」と気付かされるように、待ち望んでいた漱石の復活と再来に、心躍らされることであろう。

百年前の一九一六年逝去した漱石が生まれたのは、明治元年を翌年に控えた一八六七年であり、没後百年を迎えた翌年、私達は生誕百五十年に湧き立つことになる。織田信長が好んだ「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり」といった凝縮した半世紀の人生を、漱石は歩んだ。私は受験を経て中学校に合格した今年の三月、神奈川県立神奈川近代文学館で開催された特別展「一〇〇年目に出会う 夏目漱石」展に、母に合格祝いとして連れていってもらった。そして在学する学習院と漱石とがゆかり深いことを知り、その生涯の軌跡を共にたどることができた。私にとって百年目の漱石との出逢いは、初めて漱石の根幹にふれるものとなった。

『夢十夜』の第三夜では、負った子に「百年前文化五年の辰年」の闇夜に、自分を殺したと言われる下りがある。文化五年とは一八〇八年なので、ちょうど『夢十夜』が連載された当時の読者からみても百年前である。そして第三夜の百年の結末は、「おれは人殺であったんだな」と初めて気付くシーンである。第三夜では「我子な

が少し怖く」なり、「こんなものを背負っていては、この先どうなるか分らない」と自身の所産に苦しむ漱石の姿がある。亡くなる二年前、学習院での講演「私の個人主義」において、自分の著わした文学論は「失敗の亡骸」であり、「畸形児の亡骸」あるいは「立派に建設されないうちに地震で倒された未成市街の廃墟」だと漱石は評している。第三夜が朝日新聞に今年復活連載されたのは奇しくも三月十一日。私達は漱石の「地震で倒された未成市街」というにはやはり立派な文学碑を、「百年目」を機に夢の中ではなく、現実において再建できればと思う。

審査講評

「百年」をキーワードに時空を行き来するダイナミックな文章に魅せられた。ペルセウス座流星群と百合の匂いからロセツティの絵を導き出すレトリックも見事。

《中学生の部》

早稲田大学賞

「自己と他人」

学習院女子中等科 3年

齋藤 睦美

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

「人間にせよ、動物にせよ、己を知るのは生涯の大事である。」

人間には自分とその他大勢という境界線が必ずある。自分が自分であること、つまり自分のアイデンティティを持つ、ということは今生きている人間の誰もが無意識に自覚しながら今日まで過ごしてきたに違いない。しかし、その人間からそれぞれの特色、個性をはぎとってしまうばどうだろうか。自分と他人との間の壁を取り除き、「平等」にしてみると、自分が自分であることの意味も無くなってしまうのかと想像し、鈍い恐怖さえ感じてしまう。

「然るに赤裸の一人が云うにはこう誰も彼も同じでは勉強する甲斐がない。骨を折った結果が見えぬ。どうかして、おれはおれだ誰

がみてもおれだと云うところが目につく様にした。」

この一文は本文中に出てくる猫である吾輩のセリフである。まさに私が書いたおぼろげな不安を的確に示している。私はこの思想が人間の愚かさ、さらには歴史にまで大きな影響を及ぼしているのではないかと考えた。

人間とは自分で思っているより弱い生き物である。少しでも他人よりも優れているところを見つけ、自分は他の人とは違う人間なのだと思われたいと聞かせ、線引きすることで自分自身を見失うことへの恐怖から逃れようとする。その過程で他の人間を蹴落とすことで強者と弱者が生まれ、その間に「平等」という言葉は存在し得なくなる。本文中に吾輩が主人、寒月、迷亭の会話を聞き、その会話の中から競争の念を感じるといった一節がある。ここにもこのような思想が根本にうずまいていられるのかもしれない。

また、本文中に他者についての研究についてこう書かれた一節がある。

「人間が自己以外に飛び出すことが出来たら、飛び出す途端に自己はなくなってしまう。」まさに前に述べた思想と一致している。他人に尽くすことは結局、自分を見捨てることであるのか。つまり「思いやり」というものは端から成り立たないものであってしまうのか。

しかし、本文中には、こうある。

「人間にせよ、動物にせよ、己を知るのは生涯の大事である。」

この一文を読んで、私ははっとした。自分自身を見失うのが怖いのであれば、二度とその姿を見失わないために自分はどのような人間なのか、どのような人格を持っているのか、どのような理想を持った人間なのかを一生かけて考えぬき、自分の心に刻み込めば良いのではないかと考えた。そうすることでどれだけ「平等」のために自分と他人との境界線で迷い、争ったとしても、「思いやり」のために自己をなくし他人のところへ飛び出したとしても、最後には自分が自分であることを忘れない人間に近づけるのではないかと思う。そのような大切なことに気付かせてくれたこの一文が、今も私の心の奥に残っている。

審査講評

自分と他人との線引きこそアイデンティティーであるから平等はあり得ないという思想から、「だから己を知ることが大切だ」と導き出す展開。文章のレベルが高い。

夢十夜の感想文

新宿区立牛込第一中学校 3年

シモン エレン 優里子

作品名『夢十夜』

選んだ一行

すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、ぼうつと崩れてきた。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の眼がぱたりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。

『夢十夜』は、「こんな夢を見た」という有名な一文で始まります。第一夜から第十夜までそれぞれ違う夢の話が書かれている短編集です。全てに暗い死にまつわる部分があり、その一話ずつに夢ならではの特別な事が起こっています。

その中から「わたしの漱石、わたしの一行」として、「第一夜」の以下の部分を選びます。

「自分はただ待っている」と答えた。すると、黒い眸のなかに鮮に

見えた自分の姿が、ぼうつと崩れてきた。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思ったら、女の眼がぱたりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。——もう死んでいた。」

待つという約束に安心した彼女の眼に涙が浮かび意識も遠のいて死んでゆく様子を、女性の瞳を池に例えた書き方をしています。作家の文は美しく滑らかです。言葉の力でこの涙には速度がつけられていて「ぼうつと」にじみ出るようにゆっくりと始まり「静かな水の動き」がスローモーションで想像できます。「流れ出した」涙にスピードが付き始めた「と思ったたら、閉じた」残酷な急停止になりました。事故ではありません。

実はこれは予告された死なのです。「もう死にます」と言って本当に死ぬ女性と彼女を看取る恋人の話でした。血行もよく死にそうには見えませんが、主人公も「確かにこれは死ぬな」と思った様で「どうしても死ぬのか」と聞きます。こんな風にとぼけた場面が始まり幻想的な結末へと展開します。

夢の中の話なら断片的で唐突な事がよくあります。私は夢の中はいつも夢を見ている人の感情が支配していると考えます。だから夢から覚めると「ああ、まだドキドキする」と呟きたくなるものです。そこで「第一夜」の夢の中を支配している感情は何かと考えて、それは主人公がこの女性を美しいと思う感情だと思いました。短い話の中の半分がこの女性の描写に使われているからです。長い髪、輪郭の柔らかな瓜実顔、真白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、

唇の色は無論赤い。潤いのある真黒な眼は長い睫に包まれている。真白い頬に赤い唇と真黒な目は、「第八夜」の金魚のようにゆらゆらとのんびりしていてもったりとした中に鮮やかな色を演出しています。主人公が大好きな美しい顔です。

「私の選んだ一行」は女性の死際だというのに顕微鏡を覗くように眸が観察されていて私は主人公に異常な執着を感じましたが、話の続きでは、蘇るといふ彼女の予言を信じて百年も待つほどだから主人公の純粋な気持ちに嘘はないのでしょうか。この眸と涙の部分は物語全体がとりとめもなくシュールにできている中、悲しみや喪失感に現実味が唐突に出てくるので読んでいてぐっと切なさを感じる部分でした。たった数行が効果抜群です。

暗いばかりと書いていましたが、やはり夏目漱石は巨匠なのだと思知らされました。

《中学生の部》

佳作

『吾輩は猫である』が人間社会に訴える警告

新宿区立牛込第二中学校 2年

ブルックス 唯音

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

第一毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉罐だ

僕が選んだ一行は、「第一毛をもって裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで葉罐だ」という一文です。この一文は、主人公の猫が初めて見た人間の顔について、思ったことが書かれています。まず、なぜ僕がこの一文について書こうと思ったのかというと、猫の視点から人間を見て、思ったことを書くという発想をおもしろいと感じたからです。私達人間は自分の容姿や他人の容姿を見ても特に不思議だと思ふことはありません。それはいつも日常的に人間である自分や他人の姿を、目にしているからです。でも、人間は他の動物の姿を見ると、自分達と違う姿をしているので、不思議に思

うことが多いです。もちろん、それは自然なことですが、この地球上で人間が標準的な生物だということは、決してありません。だから、人間以外の生物でも、人間の姿や他の生物の姿を見て、不思議に思うことがあるのかもしれませんが。それを猫の視点から上手く書いている文を僕は選びました。また、この一文の他にも、私達人間が日常的に普通だと思ふことを、猫の視点から書いた場面が複数あります。例えば、主人公の猫の主人が家に友人を呼んで雑談をする場面などでは、他にやることなく、暇なのでくだらない話をして喜んでい、などと捉えられています。また、服を着たり、髪を整えたり、温泉に入ることなど、私達の生活から切り離せないことでも、猫にとっては余計なことと考えられているのです。これだけでもとてもおもしろいですが、作者の漱石はただ猫の視点から物語を書こうとしただけでなく、猫という生物を利用して、人間のあたり前の習慣を風変わりなものとして読者に紹介したかったのだと思います。それでは、漱石はなぜこのような発想を思いついたのでしょうか。純粹な日本人であれば、日本人の文化から生まれた生活の習慣を否定しようとは思わないはずですが、僕はその理由を自分なりに考えてみました。まず、漱石がこの本を書く前にイギリスへ留学していたことを踏まえると、一度日本とは全く別の環境で暮らしていたことになります。だから、その時は漱石自身がこの物語の「猫」のような、相異なる文化を持つ社会に生きる立場にいたのでしょう。そう考えると、この本は漱石がイギリスに留学したことで

生まれ、日本と異なる文化を持った国で暮らしていたからこそ、一つの文化を別の文化の立場から客観する本を書こうと思ったのではないのでしょうか。

でも、この本は人間の文化をただ客観視しているだけではなく、客観視することで、読者に自分のやることだけがいつも正しい訳ではなく、そう思わないように、注意をしなければいけないと、警告をしているのだと思いました。

《中学生の部》

佳作

吾輩は猫であるを読んで

新宿区立牛込第二中学校 2年

峯島 佳澄

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

名前はまだつけてくれないが、欲をいっても際限がないから生涯この教師の家で無名の猫で終わるつもりだ

「名前はまだつけてくれないが、欲をいっても際限がないから生

涯この教師の家で無名の猫で終わるつもりだ。」私はこの本を読んでもこの一文が一番心に残りました。なぜならこの一文でこの本の猫の気持ちが伝わると思うからです。それには二つ理由があります。

一つ目は猫は本当は名前が欲しかったのではないかと思ったからです。なぜならこの本の始まりが「吾輩は猫である。名前はまだない。」だからです。まだないということは始めは名前をつけてもらおうと思っていたと思うからです。また、私の選んだ一文の中には名前はまだつけてくれないがとっているのやはり名前をつけて欲しかったんだと思います。でも猫は無名のままで生涯を終えようといっています。それは苦沙弥先生が名前をつけてくれなくてもそこは安心できる場所だったからだと思います。

二つ目はこの一文で猫の気持ちが変わったということです。猫は初めどこでもいいから食事をもらえるところを探していました。だから猫は軽い気持ちで苦沙弥先生の家に行っただと思えます。でも猫が生涯この教師の家に住もうと考えたのには理由があったと思います。それは苦沙弥先生の家がなんだかんだいっても楽しく、安心できる場所になっていたからです。例えば、苦沙弥先生への来客がきます。その話の内容が愉快で人間の会話を聞くのがとても楽しくなったり、苦沙弥先生のとる行動がおもしろかったりするからです。また、猫が欲をいってもしかたがないし無名のままでいいというのにも理由があると思えました。なぜなら、猫は初め苦沙弥先生以外の人のことを受け入れていなかったからです。でも猫は苦沙弥

先生の家に住み始めたことによって気持ちが変わったのだと思います。猫は周りの猫友達や苦沙弥先生の子ども達のことを受け入れることが大切ということに気が付いたんだと思います。猫は様々なことを大目にみて受け入れることができたから欲をいってもしかたがないことが分かったのではないかと思います。

私はこの猫の気持ちの変化を感じて、自分の意見は必ずしも通るわけではないということが分かりました。また、猫はこのことに気付いたから私の選んだ一文のような望みが叶ったんだと思います。またその通りに生涯を終えることができ良かったと思います。私もこの猫のように周りの状況を受け入れて行動していくことが大切だと学びました。また猫のように頑張ってみようと思いました。

大切な二つの世界

新宿区立牛込第二中学校 3年

伊計 創詩

作品名『三四郎』

選んだ一行

どこまで行っても東京がなくならない

私がこの『三四郎』という本を読んで、一番印象に残ったのは、三四郎が東京に来て、どこまで行っても東京がなくならないと驚いたというところです。

なぜその部分が印象に残ったかと言うと、私も今年の三月まで沖繩にいて、四月から東京に来て同じように思ったからです。私は、沖繩にいた時、沖繩も東京も同じ日本だし、そんなに変わらないなと思っていたり、沖繩にも都会のような場所はあるから、そんなに差があるとは思っていませんでした。

だけど、いざ東京で住むことになって、来てみると、正直驚きました。まず建物の高さが違っていて、沖繩には三階建ての建物は少

ない。また、建物との距離も近く、なにより人の多さと人口密度の高さに驚きました。自分が今まで見ていた世界が本当に小さなものを感じました。

主人公の三四郎は熊本の高等学校を出て、東京へ進学して来て、今まで出会った人とは違うような人たちに出会います。その中の都会的な美禰子に心を惹かれ、美禰子に恋をするが、自分の気持ちを相手にうまく伝えることができない。結局、美禰子は、兄の友人と結婚してしまい、三四郎は失恋するという話です。

私は三四郎のように恋ではないが、東京に来たことで、いろいろなキャラの魅力的な人たちと出会うことができました。私はテニスが好きでテニスをやっているのですが、今、東京で通っているテニススクールには、世界で戦っている女の子がいます。その子は、本当に強くて、今の自分のあこがれです。東京に出て、その子に出会えたのは本当に良かったと思います。東京に来たことによって、東京だけでなく、テニスに関しては世界のレベルを知ることができました。

いっぽう沖繩も、私にとっては忘れられない大切な故郷です。沖繩では、海がきれいで、家族などささえてくれた友人もたくさんいて、本当に楽しい生活ができましたし、東京では、沖繩にいたからこそ驚きもたくさんあり、家族からも自立し、さっきも述べたようなさまざまな新しい経験ができています。三四郎が故郷を思いながらも新しい世界へ出たように、私も今二つの世界を行き来している。

改めて、私は沖縄と東京の二つの世界が見られて本当に良かったと思えました。そして、今の時期にこの『三四郎』という本に出会えて良かったと思えました。

《中学生の部》

佳作

「想像力」

新宿区立牛込第二中学校 3年

難波 佑一朗

作品名 『三四郎』

選んだ一行

「日本より頭の中のほうが広いでしょう」

「日本より頭の中のほうが広いでしょう」私はこの文を読んだときに、思わず「たしかに」と言ってしまうました。手で触れたり目で見えるような、いわば現実には限界がある。しかし、自分の頭の中にある想像力は無限だ。筆者の夏目漱石があたかも私にそう語りかけているかのように感じられたのです。

以前、私は顧問の先生に同じようなことを言われて感動したのを

鮮明に覚えています。ちょうどその時私は学校のロボット部に所属していたのですが、製作が上手くいかず、とても焦っていました。そのとき私は先生に、「最初から『創造』はするな。その前に想像するんだ。」とアドバイスをされました。最初はアドバイスの意味がわからなかったものの、製作を行っているうちにだんだんと意味がわかってきて、最終的に私は、自分の『想像』をいかに『創造』できるかという考え方をするようになりました。結果的にロボット製作は成功し、大会にも入賞できました。私はこの一件以来、常に自分の想像力を大切にしています。なぜなら、創造するためには最初に自分の想像が必要不可欠だと感じたからです。

では、なぜ『想像』することが一番最初に行われるのでしょうか。そう考えたときにいきつくのが、筆者の見解である、「想像力は無限だから」だと私は思います。例としてロボット製作を挙げると、現在の材料や技術力といった、いわゆる「現実」だけ見ている話になりません。しかし、自分の理想という「想像」については無限であるため、目標を定めるという意味でも、大切なので最初に行われるのです。

このように、その人自身の想像力によって、秘めている可能性を最大限活用できるかどうかが決まる、といっても過言ではないと思います。私は顧問の先生に一度、このことに気づかされました。その後、『三四郎』を読んで改めてもう一度想像力というものの偉大さを発見することができました。「日本より頭の中のほうが広い

しょう」これは、『三四郎』序番に出てくる、何気ない会話の一部ですが、案外とても深い意味を持っているのではないのでしょうか。今回、『三四郎』を読んでいて出会ったこの一行から学びとったことを生かして、これからも頑張っていきたいと思います。想像力は無限であることを忘れずに、問題や壁に当たった場合は想像力を頼りにする。そうすることで、自分の可能性を最大限発揮できるようにしたいです。

《中学生の部》

佳作

先生と坊っちゃんと私

新宿区立四谷中学校 3年

鎌田 琳

作品名『坊っちゃん』
選んだ一行

「俺は何がきらいだといって、人に隠れて自分だけ得をするほど、きらいなことはない。」

「俺は何がきらいだといって、人に隠れて自分だけ得をするほど、

きらいなことはない。」これは私の心に残る、『坊っちゃん』の主人公、坊っちゃんの子供の頃の『一行』だ。奉公の清というおばあさんが坊っちゃんをかわいがり、ずるい坊っちゃんの兄を差し置いて、よく物をあげた。しかし坊っちゃんはそれに甘えたりはしなかった。先述のように考えていたのである。私はこの『一行』が坊っちゃんの人柄を一番表していると思う。私は文章通りの損得の話ではなく、「曲がったことが嫌い」という解釈をした。優等生とは言えない坊っちゃんだが、何があっても決して自分の芯は曲げない。強くて真っ直ぐな芯を持つ。私に夏目漱石の『坊っちゃん』を教えてくれた国語の先生も真っ直ぐな芯を持つ人だった。

「わたしの漱石、わたしの一行」を書こうと思った時、私は真っ先にこの国語の先生を思い出した。そして『坊っちゃん』を習った時のノートや教科書、プリントを見た。先生の字が懐かしかった。今でも鮮明に思い出せる。先生の授業は厳しかったこと、問題に取り組みもうとする姿勢を認めてくれること。そして、「正直者は馬鹿を見ない。」という言葉が口癖だったこと。この言葉は事あるごとに言っていた。また、忘れ物をした時には物を忘れたことよりもそれを言わなかったことの方が怒られた思い出がある。それは丁度『坊っちゃん』を習っている時のことだった。先生は『坊っちゃん』の話を変えながらこう私に言った。

「坊っちゃんが先生になって生徒にいたずらを仕掛けられた時があった。その時坊っちゃんはいたずらよりもその生徒がいたずらを白

状しないことに怒った。それは坊っちゃんが正直に生きているからできること。あなたも他の人に胸を張れるような正直な人になれ。』私はこの言葉を聞いて私も先生や坊っちゃんのように自分で誇れるくらい正直に生きたいと思った。

先生は私が三年生になったと同時に他の学校へと異動してしまった。ショックだった。あれから私は、悪さをして正直に生きてきた。卒業するまで見ていてほしかった。そして離任式では「自分に自信を持って。」という言葉を残して去ってしまった。清と坊っちゃんの別れの場面が重なった。私は泣かなかった。しかし、もう少しで泣くところであった。

私は今、とても会いたい。『坊っちゃん』を教えてください、あの真っ直ぐな先生に。『坊っちゃん』と先生から私は正直に生きることを学んだ。それは難しいことで一番大切なことだ。正直に生きる事が難しくなったら、また『坊っちゃん』を読もうと思う。私は心の中に強い芯を持って、正直に、真っ直ぐに生きていく。

《中学生の部》

佳作

猫から見た人間

新宿区立落合第二中学校 1年

宮崎 晏菜

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

のんきとみえる人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。

「吾輩は猫である。名前はまだ無い」この文章を最初読んだとき、「クスッ」と笑ってしまいました。なぜかという、「吾輩は猫である」で少し偉いイメージがつかますが、「名前はまだ無い」だと、まるでつけて欲しい願望があるみたいだからです。でもこの猫は、生きているのを存分に楽しんでいるようにみえます。人間観察が好きで、私の中で特に心に残っている「のんきとみえる人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする」という言葉は、猫だからこそ気付けることなのかなと思いました。

この猫は、人間世界に色々な疑問を持っています。でも、猫が私

達を見ているように私達も猫を見ています。猫が私達になにか思っているように、私達も猫になにか思っています。だからこそお互いに分かることがあると思います。でも、それを伝え合うことはできません。話す言葉が、生きる世界が違うからです。だから夏目漱石は、猫の目線でこの本を描いたのではないのでしょうか。普通、伝えられる存在では無いからこそ違う視点から見たらどう見えるのか、それを人間が知る必要があったから、夏目漱石はこんな不思議な本を描いたのだと思います。この世界のことをあえてストレートに描いているから、たくさん読者に昔も今も長い間、愛され続けている作品なんだなと思いました。

「のんきとみえる人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする」この言葉は、誰にでも当てはまると思います。私は、外側ではのんきにみえても内側では悩みを抱えている、という意味だと思いました。私は時々、悩みとかなさそうと思われることがあります。心の中で、私にだって悩みの一つや二つぐらいある、と毎回思います。この文は私の思っていることをそのまま書き写したような一文です。なので私はこの文を選びました。

この本はほとんどが、猫の視線から物事を語られています。つまり、人の世界を「主体的」には見ないで、「客観的」に見ているということだと思います。私は、これがこの本のポイントなのではないかと思っています。周りからの意見を取り入れることで、新しい考えが出てきます。私の心の中で印象に残っていた文章も、客観的に見ることで

分かることだと思います。私は読者として、この本から学んだことをこれからに生かしていきたいです。

《中学生の部》

佳作

現代的気風からぬけ出せ

海城中学校 1年

遠田 剛志

作品名『思い出す事など』

選んだ一行

いわゆる「現代的気風」に煽られて、三百六十五日の間、傍目も振らず、しかく人世を覗いたら、人世は定めし窮屈でかつ殺風景なものだろう。

「いわゆる「現代的気風」に煽られて、三百六十五日の間、傍目も振らず、しかく人世を覗いたら、人世は定めし窮屈でかつ殺風景なものだろう。」この一文は、僕の心に深い混乱をもたらした。

中学受験をさせてもらい、何もかもとはいかないまでも、人生の正しい道を歩んでいる自負があった。そんな自負を打ち破るかのよ

うにこの一文は長い随筆の中で僕の目を引きつけて離さなかった。これは僕だけでなく、「現代的気風」に煽られる日本人や、世間の風潮にも疑問を呈しているといえる。

努力すれば夢はかなう、達成感や成果が得られる、努力しなければ無意味——。そんな価値観にあやつられるかのように、僕は机に向かい勉強していた。努力しなければならぬという価値に誰も逆らうことなく、おかしいと思っても大きな流れをつくり出せずにいた。

もちろん、努力して得られるものもすばらしい価値を持っている。だが、漱石の言っている「陳腐な幸福と爛熟な寛容」を味わう生き方を、生死の境にいる漱石が提示していることに、大きな意義を感じたのだ。

この一文を書いた後に漱石はこうも書いている。

「漸く生き残って東京に帰った余は、病に因って纔かに享け得たこの長閑な心持を早くも失わんとしつつある」と。

長い間、偏った価値観にいわば「洗脳」されてきたため、たとえ漱石であっても通常の生活にもどるとまるで魔法がとけてしまうように、幸福と寛容を失ってしまうとも教えてくれる。

僕も「洗脳」されていることに気づきもせず、ずっとあやつられていた。そのため、人が持ち合わせているはずのもう一つの幸福をどこかで見失ったのかも知れない。

最後に漱石は、こう締めくくっている。

「あらゆる尋常の景趣は悉く消えたのに、ただ当時の自分と今の自分との対照だけがはっきりと残るためだろうか。」

「対照」という言葉には様々な意味がある。入院中と退院後では体も心も大きく変わっているだろうから。でも、「現代的気風」の呪いからの悟りという視点で見ると、「失わんとしつつある」から「失った」に変わっているのではないか。僕はそう案じている。

漱石の一文から、新しい生き方があることを学びとり、人生の深みを少しだけ学べた気がする。またその思いを守り続けることは大変だろう。二度三度と見失うかもしれない。そんな時は自宅近くの「夏目坂」に行ってみようと思う。漱石の伝えたかったことを思い出すために。

広がる言葉

筑波大学附属中学校 2年

大野 歩実

作品名『三四郎』

選んだ一行

ただ口の中で迷羊、迷羊と繰返した。

ストレイシープ、これは「迷羊」と書く。新約聖書では「天におられるあなたたちの父は小さいもの一人でさえも亡びることを、おのぞみにならない」ということを意味する。謎めいた言葉だが、響きが何となく美しい。そしてその言葉は『三四郎』を読んでいる間、私の心の中を繰り返し流れていた。

主人公は学ぶために田舎から上京してきた大学生の三四郎だ。同級生の与次郎や遠い親戚の野々宮君といった友人たちとのつながりから美禰子と出会う。そして美禰子の雰囲気になんか惹かれていたところが、美禰子は別の人と婚約したために、主人公は失恋してしまふ。

また、少し前に原口という画家が美禰子の絵を書いていた。主人公は友人と共に絵を展示している会場に出掛けた。一方、美禰子も夫と一緒に絵の展示会場に来ていた。

与次郎から、絵はどうだ、と聞かれた主人公は、題が悪い、と答える。だが、どういう題であればいいのか、と聞かれると、言葉を詰まらす。

その時の主人公を描写する言葉がこれだ。

「ただ口の中で、迷羊、迷羊と繰返した」

そしてこの言葉でこの小説の幕が閉じる。

ではなぜ迷羊なのだろうか。そんな疑問が読み終わった後も私の心から離れなかった。

迷羊という言葉を最初に使ったのは美禰子であった。主人公には美禰子への思いがまだ残っていたのだろうか。

もしかしたら、悩む自分の気持ちへの救いを神様に求めているのかもしれない。

「失恋して、何も分からなくなっている自分だが、神様はこんな人間でも大切にしてくれているに違いない」

と自分に言い聞かせているのだろうか。

主人公の悩みはどこまでも深い。恋愛、学問といった様々な悩みが積み重なっていた。

悩みは単純ではない。だからこそ人は悩むのだろう。

『三四郎』を読んでいるうちに、私が最後にたどり着いたのは、

夏目漱石は主人公のそんな複雑な悩みを、迷羊という意味深長な一言でスパッと表してみせたということだった。その言葉の裏には、解釈を一つに絞らせないものがあつた。

『三四郎』の中に出てくる言葉が秘めている力はとても大きい。たったの一言から世界は広がる。何て素敵な言葉を夏目漱石は選んだのだろう。

私の今までの文学との触れ方は浅かったかもしれない。読み終わると、「面白かった」や「素敵だった」という感想で普段の読書は終わっていた。だが今回はたった一言に作者はどのような意味を込めたのかを探ることができた。これからも、素敵な言葉を残す夏目漱石の文学の世界を、言葉の広がりを感じながら、とことん想像して楽しんでいきたい。

《中学生の部》

佳作

度胸と優しさ

日本女子大学附属中学校 1年

石塚 結衣

作品名 『坊っちゃん』

選んだ一行

おれには到底これ程の度胸はない。

この作品の中には「度胸」という言葉が多く出てくる。「おれには到底これ程の度胸はない。」私の心をとらえたのが、この一文である。

辞書で「度胸」と引いてみると「物事に動じない心」と書いてある。坊っちゃんの、まっすぐで正義感あふれる生き方や人生において、度胸は欠かせないのではないかと私は思う。世の中の常識を、常識だからで済ませず、校長をも恐れなくて突き進んでいく坊っちゃん。間違っていることを、素直に間違っていると口に出す時、度胸がなかったらできるはずがないのだ。では何故、坊っちゃんは「これ程の度胸はない」と言ったのだろうか。

これはおそらく、坊っちゃんの度胸と生徒たちの度胸は違うということなのだろう。生徒たちは、自分たちのしたことを問い正されてもびくともせず、落ち着きはらっている。生徒たちの度胸とは、「相手がどんなことを言おうと動じず、隠し通す度胸」なのだ。一方、表裏がなく本心そのままを言う坊っちゃんにとって、こそそと隠すことは何もない。生徒とは違い「だれかに本心をじかに突きつける度胸」の持ち主なのである。それは、自分の利益など考えず、結果として自分に不利益なことにつながるとしても動じないという覚悟なのだろう。

つまり、陰でこそそとやる度胸と、面と向かって本音をぶつける度胸は、全く別のものなのである。同じ「動じない」でも、天地の差があるのは一目瞭然であろう。

坊っちゃんの度胸は、様々なものに支えられている。一つは、坊っちゃんならではの「思い切り」である。思い切りがよいから、後先考えずに思ったことを口に出せるのだ。もう一つは、なかなか見えづらいのだが「心の広さ」だと思う。坊っちゃんは自分のことだけでなく道理が通らなければ目上の人にもはつきりと異議申し立てをする。私だったら、関わりたくない、と退いてしまうようなところも、自分のことより何より、義理を大切にして行動している。自分におきかえてみると分かるが、これはものすごい器の大きさと覚悟がなければできないことだ。坊っちゃんは、それをまた無意識におこなっているのがすごいと思う。坊っちゃん本人にこれを伝え

たら、「筋が通らないから言うだけだ」ときつと言うだろう。思い浮かべるだけで声が聞こえてきそうである。しかし、思い切りで言っているように見える言葉の裏には、どこかに必ず優しさが隠れている。だから、坊っちゃんの心の広さは立派なものだと私は思う。人とは違う度胸や、世間的な人生観にとらわれないまっすぐな性格は、実は坊っちゃんの生きる力になっているのだと思う。心の広さ、義理、真率、単純。そうしたものを持って世の中を駆けぬける坊っちゃんを見てみると、「正直で何が悪い」というメッセージが深く心に突き刺さってくる。

《中学生の部》

佳作

蝦蟇口に戻した友情

日本女子大学附属中学校 1年

今井 りさ

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

「おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあった、一銭五厘をとって、おれの蝦蟇口のなかへ入れた。」

たった一杯の水水代、一銭五厘をめぐる山嵐と坊っちゃんはどうなってしまうのだろうか？ハラハラしながら私は読み進めていった。裏切り者に奢られるのは「死ぬまで心持ちが良くない」と坊っちゃんは、一銭五厘を山嵐につき返す。激しい口論にまでなるが、お互いが誤解していたと分かり、山嵐が謝罪した後の一文だ。「おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあった、一銭五厘をとって、おれの蝦蟇口のなかへ入れた。」一銭五厘のゆく末を案じていた私は、それが遂に坊っちゃんの蝦蟇口に納まってほっとしたのを覚えている。何も云わずにお金を引き込んだところは、子供っぽいようで、何だか微笑ましくて、真面目で無鉄砲な彼の気性をよく表していると感じた。

しかし、読み返していくうちに、この一文には実は大切な二つのことが含まれているのに気付いた。

一つ目は、「間違いに気付いて、自分を変える勇気を持つこと」だ。人は時として途中で間違いに気付いたとしても、プライドが邪魔をして、意地を張ってやり通してしまう事があるだろう。しかし、坊っちゃんは素直に自分の間違いを認めて行動に移した。素晴らしと思う。

二つ目は、「人の厚意に甘えて感謝することの大切さ」だ。きっと一銭五厘はすぐ返せるくらい小さなお金なのだろう。しかも一旦返したことにより貸し借りが無くなって、それで良かったのではな

いか。また、私なら「今度は私が奢りますよ」なんて曖昧に言ってしまうだけだろう。しかし、坊っちゃんのとった行動は、わざわざ蝦蟇口をとり出し、お金を引き込んで、山嵐から再び「借り」をつくることにしたのだ。何故だろうか？それは、きちんと謝罪してくれた山嵐に対しての、坊っちゃんなりの意外な気遣いだったのかも知れない。あまりに突拍子もないその行動に、山嵐は笑い出す。それで張りつめていた二人の気持ちがおほぐれて、友情が深まったようだから、この一文はとても大切に思えた。

坊っちゃんは、山嵐の厚意に敢えて甘えたことで「真の友」になった訳で、この一銭五厘は二人にとっては大きな意味を持つものだったと思う。だとすれば、坊っちゃんが蝦蟇口に戻したのは友情ではないだろうか。

『坊っちゃん』を、私が初めて読んだのは小学三年生の頃。バツタ事件の場面は楽しく読めたけれど、言葉が難しくあまり理解できていなかった。でも、中学生になった今改めて読むことで、漱石の描写の一つひとつに意味を感じられるようになり、感激した。一銭五厘の話の、現実的で人間味のあるやり取りを面白いと思えるまじになった。それをユーモアたっぷりに、一方で、日本人の真面目さ、真っ直ぐさを表現しているのが夏目文学なのかと分かった気がした。成長した私がいつか再び『坊っちゃん』を手に取って、新しい面白さに気付ける日を楽しみにしている。

正義と現実の間

暁星高等学校 1年

佐々木 保明

作品名『坊っちゃん』

選んだ一行

いくら言葉巧みに弁解が立っても正義は許さんぞ

僕が選んだ一行は、『坊っちゃん』の「いくら言葉巧みに弁解が立っても正義は許さんぞ」です。

これは、坊っちゃんと山嵐が松山を「不浄な地」と呼んで離れることとなったきっかけの芸者事件の顛末で、山嵐が自分を陥れた赤シャツを撲りながら発した言葉です。

この本を読んだ中学二年生のとき、僕自身が社会の不条理さに目が向き始めたころだったので、山嵐の言葉は自分の気持ちを代弁してくれたように感じました。

この小説の中で描かれる坊っちゃんや山嵐に対して僕は、いわゆる「侍」「日本男児」といった前近代的な印象を受けます。裏で策

略をめぐらし自分たちに濡れ衣を着せた赤シャツへの反撃の仕方と、松山から追い出されたうらなりの敵討ちをするところなどに見て取れると思います。一方、敵対する赤シャツは帝国大卒の文学士であり、言葉の力と狡猾な頭脳に加え教頭という社会的地位も利用して自分にとって都合の悪い人物は葬ってきたことなどから、欧米列強を連想させる近代的な存在と感じました。

おそらく、夏目漱石は、文明開化によって急激に近代化した社会の中で、いかさま師や嘘つきがうまく立ち回り、正直者が生きにくい社会になっていることへの理不尽さをこの小説にこめ、山嵐に最初に挙げた言葉を語らせたのではないのでしょうか。

正義感が強く融通が利かない坊っちゃんと山嵐にとって、言葉巧みに人の気持ちを操り自分の利益を追求する赤シャツは憎むべき存在でしかありません。けれども、赤シャツから見た坊っちゃんと山嵐もまた、自分の立場を脅かしかねない危険な存在です。その対立を軸として『坊っちゃん』の物語は進んでいきます。

そして、物語のクライマックスで、赤シャツを撲ることしか手段がなくなった山嵐が「正義は許さんぞ」と言うのです。

そう言った山嵐も坊っちゃんと一緒に東京へ引き上げて小説は終わっています。初めて読んだ中学二年生の時の僕は、結果的に赤シャツの策略通りになった結末に後味の悪さを感じました。古くからの正義よりも時代の変化の方が大きな力を持つのが、明治から続く近代化した現在の日本の姿のようにも感じました。しかし、今は暴

力で訴えた山嵐に「正義」はあったのかと感じるところもあります。『坊っちゃん』は、無鉄砲故に様々な事件が繰り広げられる面白おかしい小説なだけではなく、社会への風刺が数多く込められた小説だと思います。同時に、僕にとっての『坊っちゃん』は、普遍的な人間の美德と現実に初めて気付かせてくれた作品となっています。これからも、ことある毎に『坊っちゃん』を読み返していくだろうと思います。

審査講評

赤シャツが近代や文明開化を表すのに対し、坊っちゃんや山嵐を前近代、サムライ的と捉え、文明論的に分析したのが面白い。中2で読んだ時と高1で読んだ時との捉え方の変化を書いているのも良い。

《高校生の部》

優 秀 賞

夢の力

学習院女子高等科 1年

本幡 直子

作品名『夢十夜』

選んだ一行

自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった。

この一冊を読み終えた後、顔を上げると、私の目に見慣れた部屋の壁が映った。ぐぐっと現実を引き戻される。寝起きのような気分だった。この本の中に漂う不可思議な空気は、まさに「夢」独特のものなのだ。

『夢十夜』の十の夢の中で、私が一番気に入ったのは第七夜の夢だ。巨大な船の夢である。冒頭で描かれる波音に吸い込まれるように読んだ。選んだ一行は、行き先の分からない船に乗っていることに嫌気が差した男が、海へ身を投げた瞬間である。

ずっと「こんな船にいるよりいっそ身を投げて死んでしまおう

か」と思っていた男が、あっさり死ぬことを決心したにも関わらず、足が離れた瞬間に、死ぬことに激しい恐怖を感じる。この一行が、それまでふらふらと漂うような素振りをしていた男に、突然に強いどろどろとした人間らしい感情を与えているのが印象的で、この部分を選んだ。

時の流れと船の進みを重ねれば、この旅は人生を表しているように見える。少しずつ、でも決して止まることなく進んでいく人生の中で、この男は、(夢から覚めた現実で)進むべき道に迷っていたのだろう。

そして、甲板から飛んだ瞬間、男は「未来」という未知の世界から、「死後の世」という未知の世界へと、自分の行き先を切り替えたと言える。でも、未知が怖いのであれば、あの世は何よりも未知の存在であり、男が恐がるものであったはずだ。船から、そして人生から逃げることに必死だった男がそれに気付いたのは、海に向かって飛び出した後だったのだろう。黒い海面に近づきながら、「どこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかった」と悟った男の描写は痛々しい。

夢は、自分だけが知っている物語である。夢の中でどんなに恥ずかしい思いをしても、決して家族や友人に知られることはない。さっきまで夢を見ていた人が、朝になれば何食わぬ顔で、現実の世界に戻っていくことができる。だからこそ、夢とは自分に一番素直になれる空間だと思う。夢で自分の感情を押し殺すことなく、歓喜、

安心、恐怖、後悔などの思いを自由に開放することで、目が覚めてその夢を思い出して、自分の本当の気持ちに気付けるということもあるだろう。

「自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなった。」この一行は、まさに現実世界での男が、夢の中で感情を取り戻し、素直になれた瞬間だと思う。男はきっと汗だくで夢から覚めて、後悔と恐怖から開放され、自分の人生から逃げること、決してしない人間になるだろう。

夢という不思議な空間の大きな力を感じられる一冊だった。

審査講評

夢とは何か、夢の効用、夢によって現実ではできない経験をすることもできることなど、しっかりした文章でまとめている。感想文の終盤で主人公を現実に引き戻しているのも面白い。

その覚悟は白百合のように

神奈川県立鎌倉高等学校 1年

上野 美紀

作品名『それから』

選んだ一行

漂泊でも好いわ。死ねと仰しゃれば死ぬわ。

夏目漱石の作品を読むのは、『吾輩は猫である』に次いで二回目だった。初めは動かない物語に面白みを感じられず、それから、だから何、と半ば苛々していた。それでも代助の不器用な生き方や明治の現代との違いを読み進めていくうちに、その台詞は姿を現した。「漂泊でも好いわ。死ねと仰しゃれば死ぬわ。」三千代の言葉は代助だけでなく私をも戦慄させた。普段は心優しくおっとりしているからか、この時の彼女の即答には驚かされた。

代助でさえも、最後の場面では絶望のあまり正気を失っていた。世の中が真っ赤になり、自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗ろうと決心するほどだ。家族から縁を切られ、古い親友から妻を奪ってし

まった。金がない。仕事がない。仕事の当てもない。社会からも切り離された。彼はこの状況を予想していただろう。予想していたにもかかわらず、好きな女性のために行動を起こした。そう、勇氣は持っていたのである。しかし完全には腹を括れていなかった。彼に足りなかったものは、この状況を受け入れる度胸であると私は思う。その度胸を三千代は持っていた。腹を括った彼女はこう言い放った。「死ねと仰しゃれば死ぬわ。」その凜とした態度は、まるで代助が三千代に贈った白百合のように美しく、強く、堂々としていたように見えた。どうしてそこまで覚悟を決めることができたのだろう。彼女の状況も、また代助のように最悪だったはずだ。自身の身体が悪い時に三年間共に過ごした夫と離ればなれになり、無職の新たな夫を持つ。彼女もまた代助を好いていたが、代助の告白の飛び火を受けたようなものであっただろう。だが三千代はやけを起こしたのでも不真面目でもなかった。真剣に代助に自身のすべてを託し、命をも預けた上で彼を心の底から愛したのだろう。言うほど簡単なことではない。だから代助は三千代にぞっとした。また私も同様にぞっとした。三千代の覚悟は狂気じみていた。まるで代助が言えば人を殺してしまいうように。それまでの三千代は気弱で儂い女性にしか見えなかった。だからこの三千代の狂気は余計に際立っていた。

この台詞から私は昔の女性の強さを感じ取ることができた。普段物静かでもないぞという時には度胸が据わり、自分の命を託せるほどに他人を信頼できるその心、またそれほどに他人から想われる人柄。

私が憧れる人物像そのものであった。『それから』は代助が主人公であるために三千代の決意までの経緯は書かれていないが、私なりに解釈した決意は何よりも代助への愛が土台となっていた。

代助と三千代の「それから」は描かれていないが、彼らならどんな状況でもお互いを尊重し想い合っているのであろう。それからがどうであっても、彼らの未来は僅かながらも輝いている。

審査講評

この台詞に着目したのか、という意外性がある。漱石作品の裏テーマともいえる「女性への畏怖」が表されていて、昔の女性の強さと愛を感じ取っている。作品の続きを知りたいと感じさせる感想文である。

《高校生の部》

紀伊國屋書店賞

夏目漱石の『こころ』を読んで

北鎌倉女子学園高等学校 2年

伊藤 優希

作品名 『こころ』

選んだ一行

「おれは策略では勝っても人間としては負けたのだ。」

「おれは策略では勝っても人間としては負けたのだ。」

これは、遺書の中に書かれた「私」、即ち先生のお嬢さんをめぐってのKに対する心の叫びのような言葉です。

なぜ、私がこの文章に興味を示したか。初めは何となく気になる程度でしたが、先生とKの文章や会話文を読んでいると、何度もこの部分で一旦止まってしまうのです。そこから生まれた思いは、先生とKはもっと上手くお互いの気持ちを理解出来たのではないかという感情でした。

この文章は、Kが自殺してしまう直前に書かれています。先生はKには何も言わず、Kより先にお嬢さんに結婚を申し込んだ悲しい

場面。何も知らない可哀想なKは、後に奥さんから聞かされて気づく残酷な場面。とても悲劇的で胸を締め付けられました。先生のことは嫌いではありませんが、Kの気持ちを知って置いて、自分の気持ちは告げず、抜け駆けしてまでお嬢さんを手に入れた卑怯者として見ることができませんでした。まず、そんなことをしてまで友を失ってしまうなど、おかしいとしか私には思えないのです。なぜなら、Kの気持ちを踏みにじっただけでなく、自分も死ぬまで一生後悔し続けなければならないからです。特に、先生のような周囲を気にしたり、思いを伝えられずに引きずっているような人は、重苦しい思いを隠し続けることはとても辛いことだと私は思います。Kを自殺に追い込んだのは自分だと理解しているのなら尚更でしょう。先生は確かに策略ではKより上回っていたのでしょうか。しかし、Kは自殺すると同時に置き土産をしていきました。それは、先生への絶対的拒絶。謝罪を許可しなかったことです。先生は過ちに気づいても、Kに許しを請うことすらできなくなってしまった。これはKの策略だったのかもしれない。

では、他に道はなかったのでしょうか。私なら、本文でもあるように、自分もお嬢さんが好きで、Kとはライバルになると伝えるか、それができないなら諦めます。Kは先生の策略に嵌っていたのだから、追い打ちなどかけずともよかったのに。むしろ、先生がもっと厚かましなければよかったのかもしれない。恥じることなく伝えておけばKの死も、自分が自殺の道を選ぶこともなかったのに。

人間として負ける。私はそれを最初、卑怯者のことだと思っていました。しかし今は、相手をどれだけ信頼できたかだったのではないかと思います。先生もKを信じて互いを良く知ることができれば、それはどんなに幸せだったのでしょいか。理想であっても、彼らは友情を深められたらうし、お互いをライバルと意識して競い合うこともできたと思います。逃げるのではなく、相手を信じて話すことが大切なのではないかと感じました。

審査講評

「先生」と「K」の心に深く入り込んで考え、作品を自分の生きている世界に取り込んでいて印象的だった。「人間としての勝ち負け」は「相手をどれだけ信頼できるか」にかかっていると捉えている。

古戦場と心

早稲田大学高等学院 2年

小野谷 拓真

作品名『こころ』

選んだ一行

波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があったものと思ってください。

初夏という季節には、日頃訪れないような場所に足を運びたくなる。先日、といっても五月くらいのことだが、地元の古戦場跡の桑畑の中こんもりと茂って佇む塚に登って小一時間過ごしたときなどは、その妙な気分の表れだったと思う。階段をのたの上がってすぐ到達する塚の頂上では、清々しくも執拗な木漏れ日が私を歓迎する。しかし木漏れ日に堂々と映える新緑が眩しく、幾分か息苦しい。そういう時は思い切った顎から上を向いて目をつぶるとほどよい気分だ。また顎を引くと、鎌倉時代にここで合戦が繰り広げられたことに由来する碑や祠が視野に入る。そうすると昔日の戦争に思

いを馳せずにはいられなくなる。

緑豊かな場所、という点で似ている地を、『こころ』で主人公と先生が訪れている。その日、主人公は先生を、「青く蘇生よみがえろうとす

る大きな自然の中」に誘い出し、躑躅つむじが咲き乱れる「植木屋の園」に入った。先生が縁台の上に寝て、主人公はその脇で若葉の鮮やかな色彩に暫し心を奪われる。その後彼らが話し込み始めたところに、突如犬が吠え出てきて二人を驚かせ、まもなく戦争ごっこで斥候長を務めているという子どもが現れる。先生はその子に五銭をやった。彼は感謝し、そして他の仲間の子どもたちを連れて去って行った。

先生の目には戦争ごっこに興じる子どもたちがどう映ったのだろうか。その先生の遺書の終盤に、「波瀾も曲折もない単調な生活を続けて来た私の内面には、常にこうした苦しい戦争があったものと思ってください。」と記されていた。これを「わたしの一行」としたい。苦しい戦争とは、先生自身のあらゆる主体的行動を引き止めようとする心との心理的葛藤を示す。先生はそれを戦いではなく戦争と表現した。先生の心の内の心理的葛藤は一対一のものではなく、夥しい数の葛藤が干渉しあい、そして先生を蝕んでいた。もし先生の胸中で葛藤の戦争があったと喩えるならば、先生の遺書は古戦場に擬することができる。先生の古戦場を託され、それをひとりですいた主人公はどう考えただろう。おそらく彼ならば、先生が戦争ごっこの子どもたちに、先生自身の「苦しい戦争」のごとく暗然たる未来が待っている可能性を予感していたことに気づける。そう、古

戦場に立って、はじめてその「戦争」の手がかりを知ることもあるのだ。『こころ』は以前から玩読していた本で、私には馴染み深かったと思う。地元では白旗塚と呼ばれる古戦場の塚を訪れた際、先生の遺書の終盤の「苦しい戦争」が思い出されたのは本場で、後日改めて本書を読み直すと戦争ごっこの子どもという絶妙な伏線が張ってあったことを発見した。そして、戦いのあった地というのは、様々な思いが奥深く込められていると学ばされた。今度あの塚を訪れる際には、頂上の祠に賽銭をあげようかと思う。

審査講評

「先生」の心の葛藤を「戦争」と捉え、さらに作中で先生が戦争ごっこの子どもに五銭を与えるエピソードに「伏線」を見出すなど、作品を実に深く読み込んでいる。

《高校生の部》

早稲田大学賞

心の底

長野清泉女学院高等学校 2年

笠松 結衣

作品名 『吾輩は猫である』

選んだ一行

のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。

「のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。」

これは、美学者の迷亭、門下生で理学者の寒月、そして詩人の東風らが苦沙弥先生の家でいつもの如く集まり、語り終えた後に次々と玄関を出て行った後の場面である。

この後、この言葉を残した猫は自らの景気づけのために飲んだビールで酔っ払い、水瓶に落ちて死んでゆくのである。

この小説は、辛辣な風刺をしている反面、陽気な笑いに満ちている。だが、その陽気な笑いの裏には、それぞれが抱える苦悩が隠さ

れている。

例えば、美学者という見るからに気楽そうなことをしている迷亭も、現実の世界は絵に書いたような楽しい世界ではない、と痛感しているし、東風がむやみに捧げる新体詩にもあまり未来に希望がない。

のんきそうに振る舞っている人が全員本当にのんきであるかという、どうやらそう一概に言えるものではないらしい。

しかし、種類は違えども「苦惱」という「どこか悲しい音」を奏でる苦沙弥先生を始めとする人々には共通点があるように思える。

それは、彼らが「太平の逸民」であるということだ。これは猫にとっては非常に滑稽であり、嘲笑の対象になっているだろう。

迷亭らが苦沙弥宅に集い、猫にとってはどうしようもなく下らない話で盛り上がる場面や彼らの日常についての話に、この小説の面白さの大半が費やされている。彼らの下らない話を聞いているしかない猫は、人間のことを可笑しくもないのに面白がったりする外に能のないものである、と思っていたに違いない。

漱石は猫の視点を借りることによって、人間の不合理さや愚かさを浮かび上がらせたのである。私も含めた人間が日々を生きていく上では気付くことの出来ないような些細なことを気付かせてくれている。

「のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする。」

漱石が自らの思いを託すようにして描かれた猫は、小説の中で様々な「悲しい音」を奏でる人々や猫と出会っている。私が選んだ一文は、猫が出会った一人一人のことを「心の底」まできちんと見ているからこそ言えるものであるのだと思う。

私も、誰かとコミュニケーションをとる時は、相手の言葉をそのまま受け取るのではなくて表情まで読み取り、猫のように「心の底をたたいて」相手の本当の気持ちを汲みとれるような人間になりたいと思う。

審査講評

高校生らしい涼やかな目で作品を読み、飾らない言葉で表現されていて読みやすい。人間観察を続けた猫の結論がこの一行であると見抜いている。

私の鶴嘴、私の鉋脈

女子学院高等学校 1年

谷 若菜

作品名『私の個人主義』

選んだ一行

ああ此処におれの進むべき道があった！漸く掘り当てた！こういう感投詞を心の底から叫び出される時、あなたがたは始めて心を安んずる事が出来るのでしよう。

これは1914年、つまり今から百年以上前に夏目漱石が学習院にて講演した記録だ。これは自分のような青年たちに向けて話された講演であるから、百年前の当時の若者に向けて漱石が語ったことの中から、何らかのアドバイスが得られるのではないかと考えて、私はこれを読み始めた。そして私が引きつけられたのはこの「鶴嘴と鉋脈」の一節である。

私はまだ、何かの道を極めたということがない。それどころか何が自分の進むべき道であるかすらも分かっていない。これは漱石曰く、「心を安んずる事」が出来ていない状態なのだそう。

私が選んだこの一節の直前の部分で漱石は、自身の経歴を振り返り、苦悩しながらも人の考えを鵜呑みにすることはなく、あくまで自分本位を貫いたことを語っている。そして、自分の納得のいく考えにたどりついた瞬間、漱石は晴れわたった心を「漸く自分の鶴嘴をがちりと鉋脈に掘り当てたような気がした」と表現した。ということは、鉋脈を掘り当てたその時、漱石のいう「心を安んずる」ことが出来るのだろう。

では、ここでいう鶴嘴とは何なのだろうか。それは一般的な教養であったり、学問で得た知識であったり、社会において自分の力に成り得るものと、私は思う。つまり、私たち学生がこれから先養っていくべきものたちだ。

『私の個人主義』のなかで、漱石は「自己本位」のことを次のように述べている。「自分が良いと思った事、好きな事、自分と性の会う事、更にそこにぶつかって自分の個性を発展させて行くことである。」

さらに、こうした「自己本位」に、他人の個性をも尊重することも必要なのではないかと私は思う。社会の中で生きていくための倫理的修養を積むこと。これが漱石の言う「個人主義」であると考えることが出来るのではないだろうか。

今回、この『私の個人主義』を読んで感じたのは、漱石にも霧の中に立ち竦むように思った時期があったという驚きだ。今まで私は自分のやりたいことが分からない、将来が見えないということに焦

りを感じていた。ちょうど霧の中で右往左往しているような、そんな不安定な感覚だ。しかし、漱石ほどの人物にもそのような時期があったということは、それほど焦らなくてもいいのかもしれないと少しだけ感じた。これから先大人になるまでの間自分の鶴嘴を作りあげていくことで、いつか私も漱石のように心の底から自分の成し遂げたことを喜べる日がくるのだろうか。そうなれるように、努力していきたいと思う。

《高校生の部》

佳作

名前はない

女子学院高等学校 1年

前田 美樹

作品名『吾輩は猫である』

選んだ一行

吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、この下女は野良

野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。」私にとってこの部分ほど物語の中へ入り込ませてくれる台詞は無い。「吾輩」と自分の事を話すこの猫の事はそのまま吾輩と呼ぶのが一番すんなり来るので作文中では吾輩と書く。

吾輩を野良と呼ぶこの下女は吾輩が子猫の頃から吾輩を毛嫌いしていた。その事を吾輩は初めて会った時から自覚していた。吾輩は教師である主人の飼い猫で、野良猫ではないが、この下女はどうしても吾輩の事を好きになれず、結局最後まで「野良」と呼んだのだろう。一方主人の方は吾輩の事を「猫」と呼ぶ。どうして名前を付かなかったのか疑問に感じる。普通、愛情を持っていたら必ず固有名詞を付けるものではないか。私はテレビで愛車一つ一つに名前を付けている有名人を見た事がある。自分がある程度気に入った物には名前をつけるのが当たり前で、逆に名前をつけないのは例外的、普通でないことなのではないだろうか。では、吾輩の方は自分の名前が無いことをどう思っているのかと言えば、名前が無いことを気に入っている様子だ。初めに引用した吾輩の台詞にあるように、吾輩はいちいち自分に名前が無いと念を押している。

名前というものは、名前が付いているそのもの自体を完全に表せる言葉ではない。私の名前は美樹だが、人それぞれに感じる美しさや想像する樹木は同じではないだろう。私の名前だけを見て勝手に私自身を適当に解釈されるのは迷惑だ。名前が無いと、必然的に本質を見なければならぬ。だから吾輩の主人は吾輩を一つの名前に

縛りつける事を選ばず、ずっと吾輩を「猫」と呼び続けたのだと思う。吾輩自身も名称に惑わされず自分がなりたい自分になれる「無名称の自分」をととても気に入っていたのだと思う。

名前が無くて、自由に生きた吾輩は下女が言う通り、確かに「野良」っぽい所がある。下女はただ単に軽蔑して呼んだだけだと思うが私は吾輩には良い意味での野良っぽさがある気がする。野良は野や野原という意味以外にも愛玩動物が放浪しているという意味がある。吾輩は決して愛玩動物として生きなかつた。吾輩の価値観からすれば人にべったりなついて依存するよりも少し距離を置いてじっくり人を観察し、分析して楽しむ方がずっと面白いのだろう。人間に養ってもらい感謝しつつ大事な所は芯を持ち独立して少し奔放な所も忘れない。というのが吾輩が常に持続けた猫の人生観だと思う。最後まで自分のやり方、生き方を貫いた尊敬すべき「無名称の猫」のように自分の価値観を大切にしていきたい。

《高校生の部》

佳作

『それから』のそれから

早稲田大学高等学院 2年

宇都宮 理於

作品名 『それから』

選んだ一行

代助は自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗っていこうと決心した。

私は行動に対して臆病な人間である。誰かに話しかけるのも苦手で、積極的に行動を起こすことが出来ない。そのような人間であるため『それから』は私にとって考えさせられる話であった。

『それから』は悲劇である。主人公代助は最高学府を卒業しながらも定職にもつかずに父親からの資金援助のみを頼りに生活する高等遊民、今でいうニートである。父親からは縁談を迫られ続けているが彼はそれを断り続けていた。そんな代助は友人平岡が、自分が斡旋した女性、三千代と結婚したことを知らされる。しかし平岡は仕事に失敗、子供はすぐに死んでしまい、三千代は病気になるってし

まう。そんな中、代助は裏で三千代への経済援助を開始する。代助には相変わらず父親から縁談を迫られ続けるが、三千代を諦めきれずにいた代助はそれを断った挙句、平岡に三千代と別れるよう説得する。離縁を迫られた平岡は代助の父親に報告する。代助の父親は激怒し、度重なる縁談破棄の上、人妻にちょっかいをかけた代助を見限り経済支援を打ち切る。代助は職を探さなければならぬ、と電車に乗り込む。周囲の全てが赤く塗りつぶされていく狂気的情景の中、「代助は自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗っていこうと決心した」という一文でこの作品は締めくくられる。

代助は愚かかもしれないが決して馬鹿な人間ではない。生活のために労働をしないことや行動を起こさないのはそのペシミスティックな思索が故であった。恋人の三千代を斡旋したこと、困窮する三千代への支援などの行動は代助の友情や優しさによるものである。「代助は自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗っていこうと決心した」という一文が私の心に突き刺さったのは善意の行動の末、紆余曲折あって家族、友人、それから全てを喪失した代助の姿があまりにも救いのないものだったからである。

『それから』は悲劇である。しかしその結末が悲惨なものかどうかは誰にも分からない。『それから』はある種のリドル・ストーリーのような形式をとっており、タイトル通り代助のそれからが明らかされない。私はこの結末にあるのは再生であると考えている。冒頭の、真夜中にはっきりと椿の落ちる音を聞いた代助は、体に脈打つ

心臓の音を確かめるといふ描写からもわかる通り、作中の赤という色は代助の不安を表している。つまりこの結末は全てを失った代助が自らの不安や現実と向き合うことを決心したシーンであり、ここにあるのは代助の勇氣である。自らの行動の結果全てを失い、どん底に落ちてなお自身とそれを取り巻く現実に向き合うことを決心した代助。その有り様を象徴するような「代助は自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗っていこうと決心した」という一文に臆病な私は勇気づけられたのである。

《高校生の部》

佳作

人の価値と生き様

東京学芸大学附属国際中等教育学校 2年

塩津 颯人

作品名 『こころ』

選んだ一行

人は自分の持っている才能をできるだけ働かせなくっちゃうそだ

ひとの生きる目的は何だろうか。夏目漱石の作品『こころ』を読むとこのことを考えざるを得ない。特に僕の心には「人は自分の持っている才能をできるだけ働かせなくっちゃうそだ」という一行が印象的だった。

この一行は主人公「私」の尊敬する「先生」がなにもせずに日々を過ごす様子に対して、「兄」がつぶやいた言葉だ。当初、僕はこの兄の考え方に大いに共感した。近頃自分自身でも、課外活動などのやるべき事柄が増えた上に自分の生き方に関する自己意識がつき始めたからだろうか、いかに最小限の時間で最大限の価値を見出し、己の力を有効活用するかを模索するようになっていた。要するに、限られた資源をもとに最大限の学業成績や実績などの「社会的価値」を作ろうとしていた。また、この効率重視の見解は人生論を語る書物などにも裏打ちされ、自分の行動を支配する一種の「根本的な概念」となりつつあった。

ただし、『こころ』の主人公「私」は、この「兄」の才能を有用に使わなければいけない、という趣旨の発言に対し抵抗感を示す。これに僕は戸惑った。確かに、「兄」の主張は文脈の中でみると表面的で薄っぺらく感じた。だが、同時に「兄」の言葉は単独で検討すると僕が持っていた「根本的な概念」と合致した。ここで、改めて自分の持っていたこの「根本的な概念」を別の視点から見直すことになった。

一般的に見れば「先生」はなんの物質的な価値も作り出していない。

い。ただし主人公の「私」はそのような「先生」にも魅力を感じている。「私」は「先生」の物質的な価値の不足よりもより神秘的な何かにひかれていたのだ。

よく考えると自分も、人を過去に作り出したマテリアリティクな価値だけで判断するようなことはしない。ただし、自分自身は物質的な価値を追求することに一所懸命だ。この矛盾はどう説明すればよいだろう。

おそらく多くの人は世の中に物質的な何かを残さないと満足できない。ただしそれだけで幸福は保証されない。物質的な成功は「人」のごく一部であり、人の価値はそれ以外にも「先生」が持っていたような「心」の面を含む。本当の人間の価値は物質的な成功と唯心的な側面の兼ね合いを指すのではないか。

いわば当たり前のようなことだが、僕はこのことを分かっているが自らも自覚していなかった。文脈の中のこの一行を読んでその主張の薄っぺらさに気付いたように、これまで持っていた「概念」があまりにも視野の狭い見解であることに気付いた。世界の様々な国に住み色々な価値観に触れてきた「帰国子女」でありながら己の考えがいかに限定的だったか気付けなかった自分の未熟さを痛感した。

このように、『こころ』で「兄」がつぶやいたこの一行は自分が以前持っていた人の価値と生き様についての見解の再検討を引き起こした、僕にとって貴重な一行だ。

先生の罪の意識

東京学芸大学附属国際中等教育学校 2年

本多 みずほ

作品名『ころ』

選んだ一行

彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遥かに立派に見えました。「おれは策略で勝っても人間としては負けただの」という感じが私の胸に渦巻いて起こりました。

一度目に読み終えたとき、わたしはもう一度始めから読み直したい、そして先生の私に向けて語った言葉の意味を理解したいという義務感にも似た強い衝動にかられた。遺書に語られた過去はあまりにも暗く、重く、激しいもので、先生が人間全体、そして自分自身さえも信用しなくなったその理由を知るために読んでいるということすらも忘れてしまっていたからだ。

振り返れば、遺書を読んでいる間はさながら暗闇を流れる感情の濁流を下るような感覚であった。先生の過去のすべてが衝撃的で、

全文からひとくたかりを選び出すなど、到底不可能なようにも感じられた。

それから何度か読み返すと、「おれは策略で勝っても人間としては負けただの」というひとことが強く印象に残るようになった。この言葉が、先生の罪の意識の全容を表しているように思えたからだ。「恋という欲望」を鎮められなかったことに対する制裁として自殺を選んだK。彼は正面から恋に向き合い、最後まで自分の信じてきた道を貫いた。それに対し、先生は「恋という欲望」によって冷静な目を失い、Kの心の内を疑がったうえ、卑怯な手で恋を勝ち取るうとしてしまった。

Kの言った「覚悟」の意味について、先生は間違った解釈をしてしまったと振り返っている。負けたくないと思う気持ちに冷静さを奪われたことで、Kの覚悟も自分と同じようにお嬢さんに向かうものだと信じて疑わなくなってしまったのだ。もしこのとき、Kの道を一貫した意思の強さを信じ、策略など立てず正々堂々と向き合ったなら、先生は黒い影を背に負ったまま人生を歩むことはなかっただろう。しかし先生にはそれができなかった。

Kの道を一貫した意思の強さを平生では理解していたからこそ、Kが良しとしなかった「恋という欲望」に任せて彼を疑い、裏切り、幸せを手に入れたことに対し、先生は罪の意識を抱いた。そして、そんな自分の姿が憎悪の対象であったはずの叔父と重なったことに、彼は絶望したに違いない。あらゆる人間は欲望を持ち、その欲望が

悪人を生む。自分自身を含めた人間全体を信用できなくなってしまった理由は、ここにあった。

人間としての負け。それは、利己的な欲望にかられて冷静にもを見られなくなることを、人を疑うこと、裏切ることであった。果たしてわたしは、先生と同じ状況におかれた場合に、衝動ではなく理性でもって正面からKに立ち向かえただろうか。

この本は、わたしに人間の「こころ」の罪深さ、激しさ、弱さを強く印象付けた。また、それが誰にでもあるものだと知った。

最後になるが、先生は罪人でも悪人でもない、ごく当たり前の人間だったように思う。偶然、ライバルが自身の欲を自ら断つ力が強かったために、比較してしまった。ある意味、先生は不運であったとわたしは思った。

《高校生の部》

佳作

「悲しい気分に誘われるということ」

東京学芸大学附属国際中等教育学校 2年

ワンバ 英海里

作品名『こころ』

選んだ一行

事件が起こってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時漸やく悲しい気分に誘われる事が出来たのです。

夏目漱石の『こころ』を読んで、私の心に深く残ったのは「事件が起こってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時漸く悲しい気分に誘われる事が出来たのです。」という一行だった。

それは自殺したKの枕元に線香が立てられている部屋で、泣いている御嬢さんと、眼を赤くしている奥さんを見たときの「私」の気持ちを表した一行である。「悲しい気分に誘われる。」という表現を目にしたのが初めてだった。「悲しい気分になる事が出来た。」や「泣く事が出来た。」というように、そのときの「私」の気持ちを表現することが出来る言葉は他にもあったはずなのに、なぜ、

漱石氏は「悲しい気分には誘われる。」という表現を選んだのか不思議に思った気持ちが最後まで私の心に深く残ったのだ。

私に通っていた小学校は漱石氏が卒業したため、入学したころから、作品暗唱や読書など漱石氏の作品に親しむことが出来るような授業が頻繁に行われていた。当時も『こころ』を読んだことがあったが、そのときはこの表現の仕方に疑問は抱かなかった。きっと、年齢を重ねたことによって、この表現の違和感に気づくことが出来たのだろう。

「悲しい気分になる。」と「悲しい気分には誘われる。」では何が違うのだろうかと考えてみると、感覚的な問題であるかも知れないが、後者のほうが悲しい気分になった要因が周りの環境であることがハッキリとしているように感じる。つまり、自分の意思で悲しくなったのではなく、周りが自分を悲しい気持ちにさせたのだということ強く主張しているように感じるのだ。漱石氏はこの表現を用いることで「私」は親友が自殺したときでさえも、周りに誘われなければ悲しむことが出来ないくらい感情が乏しくなっていたということをお伝えしたのではないかと私は考える。

「悲しみに誘われる」という表現は、今までの私のボキャブラリーにはなかった表現のしかただが、確実にどこかで味わったことがあるような感情だった。その感情を言語として表す方法を教えてくれたのは『こころ』であり、漱石氏である。これこそ本が、作者が、読者にあたえる影響であり、読書をするこの素晴らしさではない

だろうか。

私は漱石氏によって、もっとたくさんの本と出会いたいという気持ちに誘われる事が出来たのだった。

《高校生の部》

佳作

言葉がなくても通じる心

鎌倉女子大学高等部 2年

北川 真衣

作品名 『漱石俳句集』

選んだ一行

永き日や欠伸うつして別れ行く

欠伸あくびとは、実に不思議な生理現象である。昨日の五時間目にも、そう思った。隣の席の友達が、大きな欠伸を一つ。すると不思議なことに、両隣りの子も時間差で欠伸をしたのだ。どうやら、人の欠伸はうつるものらしい。

「永き日や欠伸うつして別れ行く」
大文豪として知られている夏目漱石は、俳人でもあり、この句を

詠んだ。松山で親しい俳句仲間と別れる時に、詠んだものである。

仲の良い友人と、しばらく会えなくなる時、多くの人は、寂しさや思い出がこみあげてきて、別れが惜しくなるものではないかと思う。私も、久々に会った友達との別れ際には、最後に何を話しておこうかと考えたり、気の利いた別れの言葉を模索したりしながら、残りの時間いっぱいまで談笑する。そこまで考えて話しても「あれを言っておけばよかった!」と、別れた後に思い出して、悔やむときだっているくらいだ。

しかし、夏目漱石の句は違った。変な気負いは、全くない。別れ際も、欠伸一つ。相手にものんびりさが伝わって、相手も欠伸を一つ。気の利いた言葉などなくても、互いに気心が知れる仲だということをわかり合っているから、構わないのだ。

人間関係を作っていく上で、欠かせないものの一つとなるコミュニケーションは、言葉の力によって成り立っているように見えがちだ。実際、話し合うことで、意見を交換できたり、誤解が生まれるのを防いだりできる。言葉の力は大い。しかし中には、言葉など交わさなくても心が通じ合う関係があっても、悪くはないのではないだろうか。そんな関係の間には、春の日永ののどかさのような穏やかな空気が流れるに違いない。

俳句は、たった十七音である。その限られた世界の中で、小説よりも情報量が少ない分、読み手に沢山の想像をさせてくれる。だから私は、句集を読むのが好きだ。

また、漱石は小説の世界でも素晴らしい作品を多く残した。漱石の小説は、面白いものが多い。魅力的な人物が多く登場し、人の深い心情が上手く表現されていると思う。そして、「人間関係のバランス」が、共通のテーマとして存在しているような気がした。

小説では登場人物の何気ない日常や思想が、俳句では句に詠みこまれた漱石自身の心情や生活が、いつも強いメッセージを与えてくれる。私たちは「人との繋がりの大切さ」を教わる時もあるれば、「自己を見つめ直すきっかけ」を貰う時もある。漱石が届けるメッセージは、受けとる側の気持ち次第で変わり、読者の数だけ存在するのだ。人の心を動かす作家であり、のびのびとした句を詠む俳人でもあったことが、今でも愛され続ける理由なのだと思う。素晴らしい小説と俳句を後世に残してくれた夏目漱石を私は心から尊敬する。

中学に上がる妹に、交友関係について相談される日が来たら、この一行を紹介したい。

「永き日や欠伸うつして別れ行く」

夢より深い一行

鎌倉女子大学高等部 2年

櫻井 浩恵

作品名『夢十夜』

選んだ一行

「落ちて行く日を追いかけるようだから。」

「こんな夢を見た。」から始まるこの小説。私は今まで自分から近代文学の本を手にとることはなかったが、初めて手にしたこの本、『夢十夜』でとても考えさせられる一文に出会ったのだ。

「落ちて行く日を追いかけるようだから。」

第七夜の主人公の「自分」のこの一言。単なる船の男への返答の一言だが、私には生きる意味がわからなくなった「自分」を表現した、とても悲しい一言のように思われた。

「日が落ちる」はよく使う言葉だ。だから、「日が落ちて行くのを追いかけるようだから。」と表現しても良いような気がする。しかし、「落ちて行く日を追いかけるようだから。」と表現することによ

って、前者の表現の仕方より、なぜか、言葉にできない悲しさや不安を感じる。私はこの文は「自分」の感情をより深く伝える面、文章にマイナスイメージを与える面でも、とても重要な働きを示していると思った。

ほんの□ページで描かれたこの第七夜の夢だが、私には、まるで「人生」という壮大なものを物語っているように思われた。「自分」は自分の乗っている船は「いつ陸へ上がる事か分からない。」と言っている。そう、まさにこれを「人生」だと思ったのだ。私を含めた誰しもが、「いつ陸へ上がることができるかなんてわからない船に乗っているのだ」と。

「自分」は自分の「人生」に生きる意味を失い、ついには船から身を投げだし、「死」という道を選んでしまう。海に飛びこんだ「自分」は刹那に急に命が惜しくさえなったが、もう後戻りはできない…。

私たちだって同じ。いつ陸へ上がることができるかわからない船に乗っているのだから、いつだって「自分」のように船から身を投げることだってできるのである。しかし私は、その道を選んでしまったら、何もかもが終わってしまい、もう後悔さえできないのだと思う。それは、ひどく悲しくて残酷なことだ。命を与えられ、この世に生まれてきた限り、皆がこの船に乗り、いつか陸へ上がることを目指すが「人生」ではないか、と思った。いつ陸へ着くのか、どこの陸へ着くのか、なんて考えなくていい。どんなに苦しく

※□については、原文空白によるため

て辛くても、この船に乗ってさえいればいいのだと思う。乗っていることに意味があるから。そして、船にはぜったいに自分ひとりだけではないはずだ。家族、友人、仲間がたくさんいる。そんなたくさんさんの乗組員たちと様々な経験をしながら前に進んでいくこと。毎日、私たちの住む地球の西側に沈む「日」は「落ちて行く日」ではなく、「朝が来るための日」だ。それをおいにかけて、いつ何時でも決して「自分」のように飛び降りることなく進んでいける強い人間になりたい。

『夢十夜』、夢だけど夢以上に深いそんな一文を見つけた。

《高校生の部》

佳作

現実世界に触れること

長野清泉女学院高等学校 2年

古橋 エレーナ

作品名『三四郎』

選んだ一行

この劇烈な活動そのものがとりもなおさず現実世界だとすると、自分が今日までの生活は現実世界に毫も接触していないことになる。

三四郎が初めて東京に出てきたときの言葉だ。まるで東京が本物で、自分が違った、と自分の世界を否定しているようなイメージを与える。あまりに驚きが強いがために自信が失われ、打ちのめされたような気持ちになっていることがよくわかる。この文章がこれほど心にひっかかったのは、それが自分の時折感じる思いをびたりと言いついていたからだと思う。

三四郎が驚くのは東京の様子だけではない。その後の様々な人との出会いにも圧倒される。それを現実世界と呼ぶなら、三四郎がそ

れまでいた世界を自分の世界と呼ぶことができるだろう。

例えば野々宮さんのように、現実世界とは接触せずに自分の研究に専念するような人生もいかもしれない。わたしも、自分の小さな学校と地域の中で過ごしてきて、それなりに満足し、自分をほぼ理解しているつもりだった。しかし、現実世界に触れてそれが覆されることもある。自分が本来何者であるかは変化していかないはずなのに、何かがずれてしまう。三四郎が、学生という立場が変わるわけではないのに、現実世界が「自分を置き去りにして行ってしまおう」と感じるように。そうして、まさに自分の世界が現実世界と少しも接していなかった、という感じがある。たしかに「あぶなくて近寄れない気がする」が、必要なことだと思った。

わたしが強く現実世界に触れた思いがしたのは、夏のキャンプで知らない人と深く話をしたときだった。ある話をしていたときに、なんで？とまっすぐに聞かれることがあった。それはその人の価値観から自然に生じる質問であったが、それまで自分の中では問われることのないものだった。つまりそれはわたしにとって、自分の世界にただけでは知ることのなかった現実世界だった。わたしはその質問に答えることはできなかった。

異なる見方を知ったことで、その後自分が意識して考えることも変わった。しかもそれは一方向ではなかったと思う。自分が得たものは多かったが、他者が自分によっても何か影響を受けたと知るのは嬉しいことだった。自分は現実世界に何かをみいだし、世界も自

分に何かをみいだす。三四郎は野々宮さんや広田先生の学問の世界、慣れない女性との世界に接し、変化する。しかし同時に三四郎も、「自分がこの世界のどこかへはいらなければ、その世界のどこかに欠陥ができるような気がする」と感じる。

人は常に現実世界に接し、度が変わったレンズによって自分の世界を捉えなおしていく。世界も自分を捉えなおす。その繰り返しだ。「三四郎」は、その人間の根本となる営みをよく捉えていると思った。そしてわたし自身の営みの意味を再確認させてくれた。

三四郎は、自分には現実世界が必要だと言った。そして、わたしにも現実世界は必要だ。「はなはだ不安」ではあるが。

《高校生の部》

佳作

メッセージ

愛媛大学附属高等学校 2年

瀬崎 瑞生

作品名『夢十夜』

選んだ一行

背中の子が急に石地蔵の様に重くなった。

「背中の子が急に石地蔵の様に重くなった。」

私はこの一行、『夢十夜』『第三夜』の最後の一行にゾクツとした反面、頭の中にハテナが浮かんだ。

第三夜を初めて読んだとき、作者が何を聞き手に伝えたいのかよく分からなかった。それと同時に、内容も理解できなかった。初めの印象は不気味な話だというものだった。ただ不気味というわけではない。心の中の何かがえぐられるような感覚におそわれたのだ。その「何か」というのは罪悪感だ。この話は、我が子を負っているはずなのに、その我が子が何時の間にか眼が潰れ、青坊主になっていて、その小僧は自分が百年前に殺した一人の盲目であったというものだ。そして、自分がこの盲目を殺したのだと自覚した途端、背中の子が急に石地蔵のように重くなったのだ。「子供」とはいつたい何なのかということをまず考えた。初めの頃は、本当に我が子であり、昔、自分が殺した一人の盲目が夢の中であるため、子供に乗り移ったのではないかと思っていた。だが、何回か読んでみると考え方が変わってきた。「子供」は自分自身の罪悪感なのだと思うようになった。自分は人を殺したという過去の出来事を今まで忘れていた。だが、そのことに気がついた途端、背負っていた子供（自分の犯した罪への罪悪感）が次第に大きくなり、結果的に、石地蔵という比喻を使い、そのくらい重くなったのだと聞き手に分かりやすいように伝えたのだと思う。

なぜ、自分が殺したであろう一人の人が盲目なのか……。漱石は、「盲目」という言葉を使うことで、自分がその過去の出来事を忘れていた、もしくは、見えていなかったという意味を込めていたのではないかと思う。

以上の事を踏まえて、私の選んだ一行は、この作品にとって、とても重要であり、聞き手に残した、漱石からのメッセージではないかと考えた。そのメッセージとは、人間、自分がした嫌なことや経験は忘れたいものであるが、自分の犯してしまった罪、それから感じる罪悪感や後悔からは一生逃れることはできず、自分が死ぬまでその歴史を背負って生きていかないといいけないということ。そして、今からそういうことをしようとするならば、罪悪感や後悔は石地蔵のように重いものだということを知った上で、相当の覚悟があるのだなという忠告でもあるように思う。このようなメッセージ性のある一行に私は心惹かれた。